水明インターネット句会（選句・選評）　令和三年一一月

1	有明の雲や大人乗りにけり		秋谷風舎
2	意地悪なアリス忘るる秋時雨		古賀由美子
3	秋寒や選挙ポスター皆笑顔	諧謔味がたっぷりです。	本橋稀香
4	背信の薄き胸板咳込めり	畳み込むような切なさが泣ける。作者ご自身を責めておいでなのでしょうか。気になります。	栢尾さく子
5	買い物の最初は鯛焼き母が待つ	はじめにタイ焼きを買うのがいいです。美味しくて体も心も温まりそう。中８が気になるが思い遣りを感じる。	新井のり子
6	百年の煉瓦の学舎蔦紅葉		保坂翔太
7	それぞれに刈るに時あり稲穂波	平明さ。稲の実りの時期は稲の品種によって違う。人もそれぞれに実りの時がある。実り豊かな風景の描写が上手い。	山中淑江
8	幼馴染と食ふ勇魚の竜田揚	「勇魚の竜田揚」状況を語れる存在感のある語句です。	網野月を
9	熊穴にパンデミックも冬眠を	ユーモアがあって、冬眠が利いている。	近藤徹平
10	霜柱踏み絵の如く迷ひけり	逡巡の気持ちが踏み絵で表現されているが、踏み絵も春の季語なので…霜柱を踏みつける際の一瞬の躊躇いを、踏み絵になぞらえた感覚は秀逸。直喩が上手い。見事な霜柱をうっかり荒らしてしまった後悔とともどいなど、身近な景と心の動きを好ましく詠んだ。折角の幾何学模様の霜柱を踏んでみたくもあり、踏まずにそのままにしたくもあり。心理がはたらき複雑です。迷いが上手に表現された。	稀香　亮一 のぞみ　修 風舎　鶴城 允孝
11	空つ風身を傾けて下校かな	向かい風に向かって一生懸命負けずに歩いている姿が頼もしい。	由美子
12	通ひ路は築地の透き間寒すずめ	寒すずめの通ひ路という発想がおもしろい。寒い時期、餌を求めて市場の狭い路地にはよく見かけます。写生がきいていますね。	翔太 允孝
13	立冬の足音真夜に生まれけり		後藤允孝
14	手水舎に戸惑ひ顔の七五三	秋晴れのお宮には、このような子どもたちが大勢いた。一つずつ経験して健やかに成長してほしいもの。親の好みで盛装したが、手水の使い方は教わらなかった。お参りの子供（孫）の、とまどいながらも嬉しそうな顔が浮かぶ、軽快な調べも良い。	亮一 徹平 風舎
15	傾いたブロック塀に冬の月		木村るみ子
			るみ子 翔太 萬蝶
			由美子 萬蝶
			萬蝶 マスミ

水明インターネット句会（選句・選評）　令和三年一一月

16	正信	間違いと何を今さら神議り 縁結びの会議の結果は間違いだったと言われても、もう遅いよと神様に文句を言う所が面白い。「神議リ」は「神在」の傍題と判断。	青木鶴城
17		陽ある間に呑まねばならぬ酉の市	元田亮一
18		しし座流星群よ願ふはひとつ 和やかなひと時を上手くとらえていると思います。	河野はるみ
19	清吉	小春日や我が老犬の高いびき コロナで家にいるが若い頃は哲学を志して瞑想にふけったものだ。	井口俊晴
20	暦文 俊晴	冬籠かつて目指せし哲学科 控えめな冬桜に芯の強さが見えて良い。上五中七に共感。季語の斡旋が良い。季節外れの冬に咲く桜を不器用と表したが、逆説的に称える一方、作者の確たる生き様に重ねた優れた心情句。なお「恥ぢず」	染谷正信
21	香 香 舎 静 朝 風	不器用な生き様恥じず冬桜 母親の優しい心遣いが良く表現されていて、情景が浮かびます。親も子もいつもよりちょっと真剣でほほえましい。うれしさと心配する様が見て取れるようです。母親の愛情表現のさりげなさ母の恩は山海の如しです。	望月のぞみ
22	清吉 由美子 朝香 粉雪 さく子 月を	着崩れを直す母の手七五三 番取り合わせ、描写。「更地・星・尖」が季語を際立たせている。霜柱が立つ冬の冷たい景色が見えるようです。「星の尖りゆく」の表現が素晴らしい。	日髙道を
23	るみ子 京子 喜夫 鶴城	凩や更地に星の尖りゆく 情景が分かる。夜寒の中かじかむ指で編み物に頑張っている。むかしの母の姿を思い出しました。	野田静香
24		シェパードに引かれ散歩や落葉道	後記朝香
25	るみ子 俊晴 月を	編み物の指曲げのばす夜寒かな 季語の選択が良い。「鼻梁の高き」が死者の高潔さとその筋を通した一生を暗示している。そこに冴え冴えとした美しさの「荒星」がよく合うと思う。デスマスクの人物像が伝わるような季語選びが的確です	奥山粉雪
26	道を 正信 芳春	荒星や鼻梁の高きデスマスク	正木萬蝶
27		隣家から仏壇の香小春かな	小林京子
28	はるみ	木枯らしや赤提灯に家とおし 凩の夜は赤提灯に寄らないわけにはいきません。「家とおし」に奥様ののすまなさが入っている。	持永喜夫
29	允孝	小春日や笑顔の奥に背負ふ悔い 季語の小春日の陽と、背負う悔いの陰がお互いに生きているようです。	岡田芳春
30		冬近しハロウィンてふ狂騒も	本橋稀香

水明インターネット句会（選句・選評）　令和三年一一月

31
秋谷風舎
文添える永遠のしとねや秋の雨

32
古賀由美子
のぞみ
少しづつ記憶も消えて長き夜

33
保坂翔太
喜夫
得度する三十路の女秋海棠
全てを捨てた清さの断腸花ですか。

34
栢尾さく子
京子
笑うにも似たる慟哭菊の酒
「慟哭」と似つかぬの季語を斡旋したと思いました。

35
新井のり子
近づけばポインセチアに黄金なす

36
近藤徹平
朝日さす列島地図しるき蒲団

37
山中淑江
トンネルで電波切れるも秋深し

38
網野月を
杜父魚の口開け目開け死んでをり

39
反町　修
清吉
正信
さく子
真つ新な障子の匂ひ朝日さす
朝の爽やかな情景が目に浮かび、心地良い気分になります。張り替えたばかりの障子の白さから初冬の季節感がよく出ていると思う。健やかな朝の目覚めの実感

40
新　暦文
修
粉雪
暮仇に負けて笑顔や河豚の鍋
取合せが即かず離れず。美味しいものを前にしては全て忘れて笑顔！

41
村杉清吉
粉雪
しぐるるや暫し思案の秩父橋
情感があります。

42
丸山マスミ
道を
影正す天空の城今朝の冬
「影正す」の措辞が良い。

43
後藤允孝
のぞみ
京子
俊晴
華やかな欲の渦巻く酉の市
「華やかな欲」という表現が鮮やか。酉の市は何だかんだ言って願い事にあふれかえっているもの。

44
元田亮一
両ひざの揃ひてながし日向ぼこ

45
木村るみ子
山茶花の紅がまぶしい朝散歩

水明インターネット句会（選句・選評）　令和三年一一月

46　稀香　徹平　マスミ

悪意なき分け隔てかな鍋奉行

悪意なきがユーモラスです。痩せの大食いも、老人の健啖家もいるので鍋奉行はつらい。「悪意なき分け隔て」がいいですね。大家族では当然です。

青木鶴城

47　はるみ

神の留守指に唾つけ札かぞへ

思わずにんまりしてしまいました。長い夜を楽しんだ昔を思い出しました。

染谷正信

48　文　暦　さく子

見つめても追ふても白き冬の月

冬月の冷徹な光を無欲に表現。

河野はるみ

49

凩は窓ピカピカに吹き掃除

井口俊晴

50

靴底に現る記憶落葉山

時間がとれず、調べものもしたい勉強家の作者の焦る気持ちが短日の季語でよく表現されている。季語との距離感が良い。受験生であろうか。数が増えていく付箋に、時間の経過と受験日に刻々と近づく焦燥が表れているようだ。

野田静香

51　香　稀　道を　一　亮　文　暦　城　鶴

短日や付箋の多き広辞苑

前置きの長い落語家はおもしろくない。「熊穴に」の取り合せがピッタリ。１０月７日に亡くなられた小三治師匠は「まくらの小三治」と言われたそうですね。惜しい方でした。下手な長い枕は休むに似たり皮肉が効いてます

望月のぞみ

52　翔太　マスミ　喜夫

落語家の長き枕や熊穴に

日髙道を

53　修

今生の別れを告ぐや冬の蝶

季語の斡旋が見事。

正木萬蝶

54　徹平

立冬や流行を知るファッション誌

立冬でも、ファッション誌の世界は既に春の流行を追っている。

後記朝香

55　朝香　はるみ　芳春

大根のほろりとほどけ沁みる夜

寒い夜の大根のおいしさとしみじみとしたものが感じられる。「ほろりほどけ」のかな文字が体と心に染みる感じ。癒される句。「ほろりとほどけ」大根が詩になる言葉の技術が秀逸です。

奥山粉雪

56

ぷりとろの鮟鱇の皮肌に効き

岡田芳春

57　静香

伊賀焼の土鍋定位置冬隣

リズムが良く、暖かみがある。

小林京子

58

一声に占ふあした酉の市

持永喜夫